

幼児の異年齢集団によるふれあい遊びにおける 相互行為の検討

遠藤 晶*, 松山 由美子**, 内藤 真希***

* (武庫川女子大学文学部教育学科)

** (四天王寺大学四天王寺大学短期大学部保育科)

*** (新光明池幼稚園)

Aki Endo, Yumiko Matsuyama, Maki Naito

**Department of Education, School of Letters*

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

In this study, we examined interaction originating from physical expression in the progression of interactive play. The participants were: Oldest: 4 (2 male, 2 female), Mid-age: 3 (1 male, 2 female) Youngest: 6 (3 Male, 3 female) Ratio 3:2 (1 male 1 female). An image recording was played, and episodes of play progression were extracted. Episodes were divided into categories: "A: Taking in the rhythm/movements of the game," "B: Variations resulting from taking in the rhythm/movements of the game," and "C: Derivations from behavior resulting from mutually adopting each others' movements/expressions," and were examined in temporal sequence. Results showed that while taking in the elements of the game, they learned to relate to each other, and had gradually begun exploiting the differences in parts of the game with and without music. In addition, among the interactions within the game, we studied the frequency of appearance of restraint, response, and considerate behavior. We found the mutually responsive movements of the children's small bodies to be an important form of behavior, expressing excitement. We found that interactive play using physical expression led the oldest and youngest children to express their playful feelings and evolve while sharing the fun with each other.

1. はじめに

幼児の身体性の発達とその援助の重要性が近年盛んに叫ばれている。平成21年の新学校教育法に初めて「身体表現」ということばが入り、幼稚園教育要領・保育所保育指針でその重要性が認識されはじめてきた。身体表現については子どもの心身の発達に不可欠であるが、教育内容や教育の効果について十分検討されなければならない。幼児の身体表現を考える際に身近な遊びの中でリズムを楽しむことや身体で表現することは重要である。歌いながら遊ぶ「ふれあい遊び」は、個人の表現性や、人間関係に影響を与え、年齢の異なる集団における遊びの経験では、より多様な経験が期待される。

小林ら(2008)¹⁾は、幼児の社会性の発達を明らかにすることを目的として子どもどうしの遊びを通じてピア形成の検討を行っている。5,6歳児の見知らぬ子ども集団において保育者が介入して伝承遊びの「あぶくたった」をしたところ、遊びの台詞が言えることや、個性が発揮され集団意識へ伝えられるようになることに年齢差が見られ、社会性が行動化されることを示している。

神沢(1960)²⁾は、ソープの「遊びの価値」についての理論を取り上げ、遊びには、「身体的な面」「教育的な面」「社会的な面」「パーソナリティをつくることに関係している面」「治療的な面」の5つの重要な側面があることを述べながら、遊びが幼児の身体をはじめ、社会性や人格などさまざまな発達にとっ

て必要であることを示唆している。さらに、遊びが子どもの発達に寄与し、また、子どもの遊びが楽しく発展するためには、保育者の遊びの観察と援助が重要であることも同時に述べている。

本論文では異年齢集団におけるふれあい遊びの内容を記述することで、幼児の特性を示す相互の関係性について検討する。

2. 先行研究の検討

2.1 幼児期の集団遊びと保育者の援助の重要性

子どもの社会性を培うことが可能な集団遊びとは、どのようなものであろうか。

集団遊びについて、久富(1961a)³⁾は、「集団遊びとは、郷土遊び、ゲームなどを含む仲よし遊びで、現在、幼稚園、保育園の保育内容として、広く計画、指導されている遊びである」と定義している。久富はそのうえで集団遊びを成立させるために保育者が考える指導目標を列挙しながら、「子どもたちが興味を持ち、生き生きとその遊びにとりくむことが必要である。それには、子どもたちの心身の発達に適応した遊びを選ぶことが、指導の第一条件となってくる。どんなにおもしろい遊びを、上手に指導しても、それが前述の条件に合わない場合は、教育的効果をあげることはできない」と述べ、子どもの発達に合わせた遊びを指導することが、子どもの興味や関心を高めることができるということを示している。

さらに、久富は、子どもの発達と保育者の援助についても触れ、「年長児になるほど好まれるものは、競争遊び、知的遊びであり、年少児になるほど簡単な社交遊び、手遊びが好まれる」という全体的傾向を明らかにした。そして、久富は、続けて遊びに興味を示す子どもについては4パターン、遊びに興味を示さない子どもについては3パターンあり、年齢による発達に加えて、それぞれへの援助の重要性と援助方法等をまとめている(久富 1961b)⁴⁾。

このように、幼児の集団遊びとは何かを問うことにより、幼児の集団遊びを楽しめるものとして持続させ、さらに発展させていくための保育者の援助の重要性が浮き上がってくる。幼児の集団遊びおよびそこでの保育者の役割や援助については、さらに多くの研究がなされている。

角田(1976)⁵⁾は、集団遊びがどのような年齢においても保育者から教わって覚えていることを挙げている。そして、年齢によって集団遊びの特性の違いを上げ、保育者の援助の仕方や保育者の遊びの中での役割に変化があることを述べている。

福田(2001)⁶⁾は、「子ども一人ひとりをどのように育てていきたいのかという見通しと、遊びを想像していくことが密接にかかわっている」と述べ、保育者の援助が集団遊びに非常に重要な役割を持っていることを明らかにしている。特に、異年齢集団での遊びを観察し、「異年齢集団では年齢幅や能力差も大きく、能力が同じであることを前提としない多元性をもっており、遊び仲間も多い」と、比較的少数で固定化される傾向がある同年齢集団による遊びとの違いを明らかにした。

田丸ら(2007)⁷⁾は、5歳児を対象に「あぶくたつた」の自由遊び場面の観察から子どものピア関係形成について明らかにしようとしているが、その際に使用した「保育的プログラム」とは、「なべなべそこぬけ」や「あぶくたつた」などふれあい遊びを重要視したものであった。田丸らの一連の研究からは、ふれあい遊びで子どもどうしが一緒に遊ぶことがピア形成において重要な補助的役割を果たす(田丸ら 2008)⁸⁾と考えられた。

田中(2010)⁹⁾は、鬼ごっこ成立以降の4・5・6歳児が、集団を意識して遊ぶようになる過程を発達的に検討し、年齢によって遊び方や楽しみ方が違うことを示した。田中によると、3歳児以前は「相補的な特徴の強い追いかけて遊び」であるが、4歳以降になると「ルールの明確な鬼ごっこが成立」し、「6歳を過ぎるとより仲間を意識した鬼ごっこへと展開する」ため、「鬼ごっこの発展の背景には、保育者による遊びの指導が必要とされる」とまとめ、保育者は子どもの興味や関心を的確に捉え、遊びを援助しなければならないことを示唆した。さらに、保育者の援助については、追いかけて遊びの一つである「マテマテ遊び」における「保育者は逃げる子どもを後ろから追いかけて、捕まえるとぎゅっと抱きしめると

いった関わりを行う」という場面を引用しながら、「子どもは保育者に捕まらないように逃げたいという気持ちを持ちながらも、保育者に捕まえて抱きしめてもらいたいと期待して逃げている。このようなマテマテ遊びの中では、保育者の存在そのものが、遊びの主要な要素となっている」と結論づけた。このことは、幼児の集団遊びにおける保育者の援助には、幼児とのふれあい、かかわりが重要であることを示している。

大倉(1999)¹⁰⁾は、「わらべうたはゲームの要素に富み、個人でも遊べるが、そのほとんどはグループゲームである」と述べ、わらべうたと集団遊びの関連性を指摘し、「わらべうたで遊ぶことを通して、方向感覚(前後左右)や、序数、数量、係数、比較などの数学的認知能力を培う。意見を出し合い、協力して勝つために工夫をする。思いやりや共感的態度で、仲間と共に遊び社会性を養う。ルールを理解し、遵守しながら楽しむ。また、ルールを守れないと遊ぶことができないことを知る。ルールが不相当と思ったときには、ルールを変更する工夫がなされる。幼児の道德性の発達に非常に大きな影響をもたらす」「わらべうたでの遊びは、知的な面を持ちつつ、瞬時に状況を判断して行動することを要求される。そのため、スリルに富み幼児の興味を深めていく。何回も繰り返して、遊び方も上達させ、工夫を重ねていく。体を使って遊ぶことから、運動機能も発達させていく。知的な理解も動きを伴うことで、より理解しやすいといえる」と、集団遊びと子どもの発達の関連について述べている。

集団遊び論の中でも「円になる遊び」については、興味深い指摘がなされている。異年齢集団の集団遊びのよさと集団遊びを援助する保育者の役割の重要性を先に示した福田¹¹⁾も、「あの橋が落ちる前に」という遊びを例にとり、「手をつないで円になり、向き合って歩くが、円の持つ雰囲気だけでも嬉しい。この歌が歌われると子どもたちは手をつないで回ることを楽しみだす。友達と一緒に何かを楽しむ期待感がある」と述べ、円の持つ雰囲気と、子どもが手をつないで回ることにより興味や関心を高め、遊びをより楽しんでいることを示唆している。

2.2 研究方法について

子どもの社会性の発達について研究した先述の田丸ら¹²⁾は、子どもの社会性の発達の要素を個別に見るのではなく、総体を捉えることにより幼児期の発達が明らかにできると考えている。保育的観察を通して、幼児の行動をコーディングしたり、インタビューをしたりとさまざまな方法で子どもの発達を調査している。

母子の葛藤的やりとりの発達の変化について研究した坂上(2002)¹³⁾は、「子どもの自律性の発達の問題は、親子システムの発達の問題として考えることができる」とし、子どもだけで発達を見ようとするのではなく、母と子の相互作用的な見方で、「親子というシステムの変化の側面こそ明らかにする必要がある」と述べている。本研究も、幼児の遊びの変化の側面を明らかにすることで、子どもの身体性についての考察を試みたいと考えている。

3. 方 法

3.1 調査対象:大阪府私立S幼稚園の年長・年中・年少クラスおよび満3歳児クラス在籍児(以下「満三」と記載)の15人(男児7人、女児8人)が参加した。内訳は、年長:4人(男2女2)、年中:3人(男1女2)、年少:6人(男3女3)、満三:2人(男1女1)である。観察のために一緒に遊ぶこと、保育者にかかわって観察者らが遊びを行うこと、VTRに記録することに関しては、子どもたちにわかるように事前に説明を行った。

3.2 調査期間:2008年12月19日。午後の預かり保育の時間帯に遊びの時間を設定した。

3.3 ふれあい遊びの実践と観察:手遊び、集団でのふれあい遊びを含め約30分間遊びの時間を設定した。そのうち、20分が経過したころから「あの橋がおちるまえに」の遊びをした。

使用した「あの橋がおちるまえに」(作詞・福尾野歩 作曲・才谷梅太郎)の遊びは、2人が両手をつないで高く上げ、橋をつくる。他の子どもは手をつないで輪になり、歌に合わせて橋をくぐりぬける。歌の最後は橋が「ガッチャン」と言いながら手を下し、くぐりぬけようとする子どもを捕まえる遊びであ

る。本研究では、初めて出会う異年齢集団での遊びの観察を目的とするが、福田(2001)の研究から、円になる遊びは、初めて経験する幼児でも楽しく遊べるもので、子どもどうしの多様な観察内容が得られることができると考え、「あの橋がおちるまえに」の遊びを観察対象とした。

遊びの指導及び援助は筆者ら3名がかかわった。子どもにとって初めての遊びであるので、具体的な遊びの方法と簡単な説明を行った。徐々に子どもたちが主体的に遊んでいるかに配慮し、自然にかかわるように進めた。

遊びに参加した観察者はN, E, Mで示した。Nは園で日常の保育に関わっている。EとMは園の観察を継続的に行っており子どもたちとは交流があったが、直接遊びの中でかかわることは初めての機会であった。

3.4 分析の方法：ふれあい遊びの様子はVTRにより記録した。分析の場面については、約7分40秒間の遊びの場面が対象とした。筆者ら3名が独立でVTRを再生し、身体表現についてのエピソードを時系列で記録した。なお、子ども同士の関わりの記録の確認については、共同研究者間で検討し、整理を行った。

4. 結果と考察

4.1 遊びの進行

「あの橋がおちるまえに」の遊びは、歌の提示から、遊びのルールを理解し、集団での遊びへと進行し、個々の思いやかかわりを生む遊びへと発展した。歌のはじめから終わりまでを1区切りとし回数ごとのエピソードをまとめ、遊びの状況を記述しながら考察する。子どもの特性を示すためにエピソードでは対象児を〈年長1〉と記しているが、これは〈所属クラス：観察対象児番号〉を示している。

〈1回目〉

Eは、動きは伴わず遊びの歌だけを手をつないだ状態で伝えた。子どもたちはEが歌うのを聞いている。〈年少9〉歌のリズムにあわせて身体をゆらせる、〈年長1〉が歌にあわせて前に出てくる、〈年長4〉が歌の最後のフレーズでリズムを足踏みする、というように、歌のリズムに触発されたリズム行動が見られた。

〈2回目〉

Eは「全員で手をつないでまわる」ことを伝えるために、子どもたちと手をつなぎ「お手手つないだままこっちにまわるよ」と言葉をかけたあと、歌いながらLODに回り始めた。手が引っ張られ全員に動きの方向、リズム、速さが伝わっていった。この時、Eの対面にNが子どもと手をつないで軽く跳ねながら回っており、年少の子どもたちが戸惑いながらも、「回ること」が身体感覚を通して理解され15人で回る感覚が均等に伝わったようである。言葉を介して説明するよりも、動きを見える形にすること、やってみることが有効なこともある。歌い終わりにEとNが「回るの、上手だね」と子どもの動きを認めた発話をしており、子どもたちに、「回る動き」の確認が行われていた。

〈3回目〉

NとEが向かい合って橋になることを提示した(図1)。子どもたちがその中を通る。手をつないで回るという動きには変化はないが、「橋」ができることで、橋を見上げる、橋をくぐった後に笑いが



図1 「あの橋がおちるまえに」の遊びのようす

出るなど、子どもにとって楽しみな要素が加わったと考えられる。狭いところを通ること、円を一周まわると自分が橋をくぐる順番が回ってくるなど、楽しみが待ち受けている。歌の最後に「ガッちゃん」といいながら、EとNがつないだ手をおろすと、〈年長1〉〈年長2〉〈年中5〉の3人が、腕の中に入った。

橋にかかった3人が橋になることをEが説明するが、その間に〈年少13〉がすわりこみ「ははは」と声をあげて笑いながらこける、〈年中6〉が「きゃー」と声をあげる、〈年少11〉が手をひろげ広がろうとする、〈年長4〉が足をひろげてこけると〈年少13〉も同じようにこける、など、子ども同士の遊びを楽しむ行動が広がった。手が離れそうになる時、支えられたもう片方の手を握り返され、また遊び歌に参加するなど、周りの子どもたちによる支え合いや、Nが円の修復を補助していたことなど、遊びに飽き始め崩壊しそうに思われたが何とか維持されていた。

〈4回目〉

橋は、〈年長2〉と〈年中5〉、〈年長1〉とNの2つの橋と、Eが一人で作った橋の3つができた。その下を子どもたちだけで手をつないでまわることになった。〈年中6〉が橋の高さに気付いて、橋にあたらないように背を低くした。〈年長3〉は背を低くしなかったため、頭が橋にあたった。このことを見て、〈年少13〉は背をかがめた。〈年中7〉も背をかがめた。このように、橋に対する自分の姿勢を楽しむ行動が見られた。また、歌の終わりに橋にかからないように、急いで歩くなどが見られ、身体の使い方を調整することが観察された。

4回目の歌が終わった時、Nは〈年長1〉と一緒に「ガッちゃん」といいながらしゃがみ、橋の中にはいった〈満三14〉をぎゅっと抱きかかえた。〈満三14〉と手をつないでいた〈満三15〉も、Nの方に跳ねて近寄り、Nの顔に近づけ、うれしそうな表情を示している。少し離れた〈年少9〉はぴょんと飛び跳ねると、手をつないだ〈年少8〉もぴょんと跳び、2人で顔を見合わせて跳んで喜ぶなど、楽しい表情が増してきている。

〈5回目〉

〈年長2〉と〈年中5〉が橋役からまわる役に参加したので、橋は3つになり、回る役が10人で始められた。Nは円の外で見守っている。Eが歌った歌は4回目のテンポよりやや遅くなっている。子どもたちだけでまわるのを見ると自然とテンポが変化したようである。子どもの集団内でのリズム感の調整が難しくなったこと、橋の数が増えたことで通り道がくぐりにくくなったことなど、遊びの進行による変化が、リズムに現れている。橋をくぐる時、しゃがみながら歩く、立ったりしゃがんだりを繰り返すなど、「手をつないであるく」ことよりも「橋をくぐる」ことに興味をもち、子どもたちの間で自律的に遊びが進行しているように感じられた。

〈6回目〉

橋役が4組、わたる役が7人に減ってくると、「橋」が入り組んだ形で並んでいるので、より通り道が分かりにくくなっている。〈年中5〉を先頭に7人が手をつないで回っている。窮屈な空間をくぐっている様子で、歌のテンポもさらに遅くなりっている。Mは橋役に「わー、すごい橋、つながるかな?」「あ、ステキな橋」と声をかけ、橋になっている子どもの気持ちを代弁し伝えようとしていた。6回目が終わった後、〈年長3〉がぴょんぴょん跳ぶと、〈年少13〉がぴょんぴょん跳ぶ。他にも橋になっている2人がEの説明の時も橋を作って楽しんでおり、楽しさを共有する行動が多く見られた。

〈7回目〉

6回目が終わって、橋にかかっていない5名を確認し、回る準備をしているとき、〈年長2〉が「手をつなぐの?」と尋ねており、手をつないで渡ることが不自由な動作であることを認識されての発言であった。一人ずつ回ることになり、〈年長4〉はしゃがんだまま、〈年中7〉は両膝を床につけて、膝で歩いたり、這ったりしている。〈年少10〉はしゃがんだまま歩き、それぞれの姿勢を変えている。〈年少11〉は非常に興奮気味で、橋にぶつかって勢いよく歩いているが、途中円からぬけだし、Nに抱っこしてもらっていた。一人で多く的人数に囲まれた空間を通り抜けることは怖いようである。それだけに、〈年少11〉が橋にかからないようにうまくくぐり抜けたことを「だって(橋の前で)止まった」とMに話をしており、最後まで残れたことは、人に伝えたくなる程の楽しい体験だったようである。

上記のように回る役から順に橋役になり、7回歌を繰り返すうちに徐々に緊迫感のある遊びに展開さ

れていった。ルールを知らない遊びでも、動きの方向や動き方はわかりやすく、年長から満三歳児までの年齢の異なる子どもたちが歌と動きのリズムや遊びのイメージを共有しながら遊びの楽しさを深めていた。

4.2 遊びの進行に伴うエピソードの分類

遊びの観察で得られたエピソードは、「あの橋がおちるまえに」の遊びのリズムや動きを身体表現の観点から記述した。遊びを取り込もうとした結果身体に現れた行為や一人ひとりの派生した動き、あるいは、相互にかかわる行為などに分類されることが考えられた。そこで、エピソードを行動の特性により、筆者らで以下の3つのカテゴリに整理した。

- A 遊びのリズムや動きを取り込もうとする行為
- B 遊びのリズムや動きを取り込んだ結果生じた遊びの変化形
- C 個人の動きや表現から相互にかかわる行為に派生したもの

ただし、BからCへ派生したものと考えられるのは、「遊びのリズムや動きを取り込んだ結果生じた遊びの変化形が、相互にかかわる行為に派生したもの」と考え、両カテゴリにまたがるものとして分類した。遊びの進行によって、カテゴリの内容がどのように変わるかを示したのが 図2である。時間の経過については、VTR 再生により、歌のはじめから次の歌の始めを手がかりに測定した時間間隔については、1回目から2回目は38秒、2～3回目は69秒、3～4回目80秒、4～5回目65秒、5～6回目96秒、6～7回目92秒であった。Eが子どもの様子を見ながら歌うため、毎回歌の所要時間は異なっていた。同様に「ガッチャン」の部分についてもテンポや遊びへの展開などを含み、厳密な時間経過を示すには限界があった。図2には、歌の部分と終わってからの遊びの部分とを区別しながら、3つのカテゴリの推移を示した。

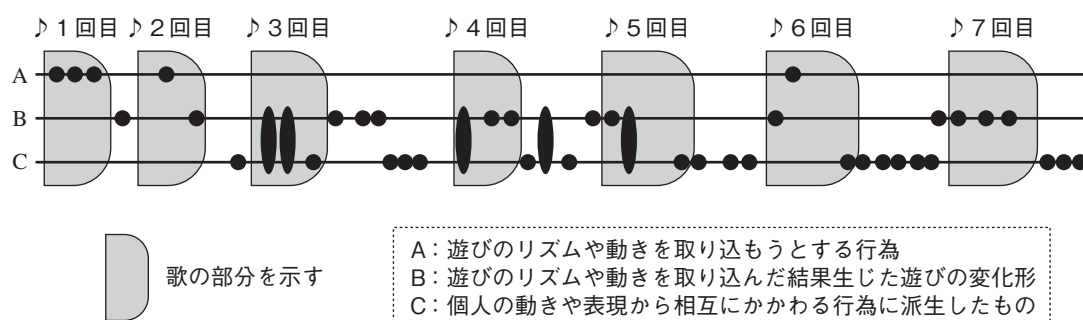


図2 遊びの進行に伴うエピソードの分類

1～2回目に見られたのは、AおよびBの遊びのリズムや動きを取り込もうとする行為または遊びのリズムや動きを取り込んだ結果生じた遊びの変化形に分類されるものであった。遊びに慣れない状況であっても、リズムに合わせようとする姿勢が伺えた。

3～5回目には「B」「C」「BとCにまたがる」のカテゴリに分類されるもので相互にかかわる行為があらわれた。遊びから触発される関係の深まりが見られ、手をつないでいる状況と橋とその下をくぐるという役割などの各々のイメージする動きに関する遊びが関わりのきっかけになっていた。

7回目で「B」のカテゴリに見られる遊びの変化形がエピソードとしてあげられていた。最後まで橋にかからないようにしようとする意気込みから、手をつながないでひとりずつ移動する姿に現れている。

5回目以降は相互にかかわるエピソードが増し、回数を経る毎に歌と歌の間の時間が増加している。ルーティン化した遊び以外の時間に子どもたちが楽しみを共有し、次の展開への期待を高めながら繰り返しのある遊びを大切にしていることがわかった。

4.3 遊びの過程で見られた相互調整行動について

山本(2000)¹⁴⁾は2・3歳児の集団的活動を新たな段階に導く相互調整的行動について「集団的活動の目標やルール、その活動に参加している者の範囲など、参加者の間でお互いにその活動に関する基本的な

了解事項を共有し、お互いの行動をうまくかみ合わせ、そこにズレが生じた場合には適宜調整を行っていく機能を持つ一連の行動」と定義している。本研究におけるふれあい遊びのなかでも、遊びの中で子ども同士や大人とのかかわりが見られた。遊びを維持したり、年齢の異なる子ども同士ならではの行動、楽しみを共有するための行動であろうと思われる次の3つの要素に分類することができた。

一つ目は、遊びに飽きたり、逸脱した行動を取ろうとしたりすると、手をつないでいる相手が手をぎゅっと握り返し、行動の立て直しをする際にみられた行動で、ここでは①「制御行動」とした。二つ目は、遊びが楽しいと感じてびよんびよんと跳びあがると、近くにいる子どもがそれに呼応するようにびよんびよんと跳びあがる行動である。その関係は必ずしも隣にいる者同士の行動ではなく、近くにいる間柄、向かい側にいる子どもとの関係で発生した。また回数は少ないが、つないだ手を一緒に揺らすなどの場面も同じと考えた。ここでは②「呼応行動」と命名した。三つ目は、手をつなぐ時に、年少と関わっている年長児によくみられた行動であるが、自分より背の低い年少児と手を合わせる際に高さを調整し、自分の方からそっと手をとりにいくなど、相手に対する思いやりを持っている行動と判断できた。これを③「思いやり行動」と名付けた。この3つをふれあい遊びに見られる相互調整行動として、筆者らが同時にVTRをみながら判定を行いデータ化した。歌い始めから次の歌をはじめのまでを1つの区切りとして、1回目から7回目までの区切りごとに、3つの相互調整行動の頻度を示した(図3)。

相互にかかわる行動を見ると、「制御行動」は5回目までに見られ、「思いやり行動」は4～5回目に見られた。「呼応行動」は2回目から出現し、7回目まで継続的に表れており、遊びの楽しさ、親しい人と遊びを共有し、身体でやり取りしていることがわかる。

さらに、相互調整行動の3つのカテゴリが年齢関係でどのように見られたかについて、1回目から7回目までの行動頻度数をこみにして示した(表1)。年齢の関係で行動を分類し、制御、呼応、思いやり行動の頻度を見ると、制御行動が年長児または年長から年少児に向けて、思いやり行動が年長・年中児から年少児に向けての行動で、年長・年中児に見られた行動であった。遊びに飽きてきて円の繋がりが崩れそうになるのを、手の力加減を上手く利用して、年長児が年少児の手を固く握り年少児の気持ちを立て直したり、時にはゆるく握って、状況判断して巧みにかかわる様子、思いやり行動は子どもの高さに合わせて橋を作るなどの行動から読み取れた。

一方、呼応行動をみると、年上の行動を受けて年下の子どもが反応したのが8、年下の行動を受けて年上の子どもが反応したのが5で、年齢の枠組みで呼応行動をとらえることは難しく思われた。むしろ呼応行動のような小さな身体の動きは楽しさを伝え合う重要な行動であると思われた。身体で表現するふれあい遊

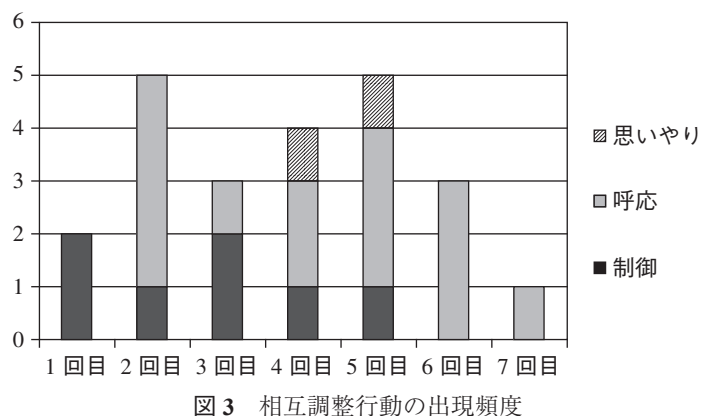


表1 年齢間に見られた相互調整行動の頻度

		制 御	呼 応	思 い や り
同 年	年長→年長	1		
	年少→年少		1	
	計	1	1	
年 上 → 年 下	年長→年少	6	4	1
	年中→年少		2	1
	年少→満三		1	
	大人→年長		1	
	計	6	8	2
年 下 → 年 上	年少→年長		2	
	年少→年中		1	
	満三→年中		1	
	満三→年少		1	
計	0	5	0	
合 計	7	14	2	

びは、年長児も年少児も心躍る気持ちを行動に示し、相互に楽しさを共有しながら展開されていることが分かった。

5. 全体的考察

集団遊びに参加している子どもたちの様子からは、一人ひとりが楽しんで参加している様子が見られたことに加え、回数を経る毎に、異年齢児の子どもたちが相互に関わりを持ちながら、また楽しさを身心で共有しながら、楽しんでいる様子が見受けられた。発達年齢の異なる子どもたちが、共に同じ遊びを30分飽きることなく遊び続けたことは注目し得る。詳細にデータを見てみると、制御、思いやりに分類した行動は、いずれも円になっているつないだ手と手に現れる行動であった。制御、思いやり行動は、円の形態を壊さないように子どもなりに気を配りながら、かかわる様子であり、限定された動きのなかにも、小さな年齢の子どもへの配慮とも思える行動である。それに対して、呼応行動は必ずしもそうではなく、むしろ楽しいことを身体に表しながら年齢の枠を超えて子どもどうし共有しているような場面も含まれている。

そして、今回の遊びの観察を通して、異年齢児遊びの特性が見られ、その特性が遊びの成立に大きく関わっていることが分かった。年長児は見通しを持ち、遊びを継続させようという意識や、他者への配慮という柔軟な調整力が観察された。また、年少児は無邪気で、周りを気にせず自分なりに全身を使って自由に表現し、天真爛漫で自由な表現が年長の子どもたちに影響を与え、遊びの成立にも貢献していることが観察された。このように、年齢の隔たりを超えた相互の関わりが異年齢児の遊びに大きな役割を果たしていることがわかった。

課題として残されたのは、研究方法の限界であった。相互作用の手がかりとして身体表現の観点からのアプローチを試みた。微細な動きや関わりに相互作用の観察の糸口があることが分かったが、観察の記録をより詳細に行う方法については今後の課題としたい。

引用文献

- 1) 小林勝年, 寺川志奈子, 田丸敏高, 石田開, 小枝達也(2008)「保育的観察に幼児のピア形成に関する研究(7)」『日本発達心理学会第19回大会発表論文集』p.348.
- 2) 神沢良輔(1960)「集団遊びの発展の条件と指導について：集団機能および役割の分化を中心として」『幼児の教育』59(8), pp51-59.
- 3) 久富御治代(1961a)「幼児の集団遊びの指導(1)」『幼児の教育』60(3), pp16-19.
- 4) 久富御治代(1961b)「幼児の集団遊びの指導(Ⅱ)」『幼児の教育』60(4), pp40-44.
- 5) 角田巖(1976)「園庭における活動的な集団遊びの発生と経過について」『日本保育学会大会研究論文集』29, p36.
- 6) 福田正子(2001)「集団遊びの構成要素について－4歳児の実践記録から－」『富山短期大学紀要』36, pp.195-199.
- 7) 田丸敏高, 小林勝年, 寺川志奈子, 石田開, 植木綾子, 小枝達也(2007)「保育的観察に幼児のピア形成に関する研究(1－方法論的考察－)」『日本発達心理学会第18回大会発表論文集』p.546.
- 8) 田丸敏高, 石田開, 小林勝年, 寺川志奈子, 小枝達也(2008)「保育的観察に幼児のピア形成に関する研究(9)」『日本発達心理学会第19回大会発表論文集』p.350.
- 9) 田中浩司(2010)「年長クラスの集団遊びに見られる人間関係－鬼ごっこの指導についてのインタビューと実践記録の検討－」『福山市立女子短期大学紀要』37, pp.49-58.
- 10) 大倉三代子(1999)「幼児の集団遊びとしてのわらべうた：自主シンポジウム20 わらべうたの教育力を探る」『日本保育学会大会研究論文集』52, p.S65
- 11) 前掲書(6)
- 12) 前掲書(7)
- 13) 坂上裕子(2002)「歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達的变化：－母子における共変化過程の検討」

『発達心理学研究』13(3), pp.261-273.

- 14) 山本登志哉(2000)群れ始める子どもたち 自律的集団と三極構造 岡本夏木・麻生武編 年齢の心理学：0歳児から6歳児まで,pp103-141. ミネルヴァ書房